八葉

蕉翁發句説叢大全巻第三

葛飾　素丸　著述
同　南臺　撿校

夏部

[illegible]

林　云紹巴法眼秀吉公へ連歌の秘事を授上らるるよし発句
弘仕立へすくすくとして毎年五尺のびやかにそそき
るるにひとしく仕立るかうよしとの説ありしも島月雪八京
物の一ツなれども一ト色物なれども五尺のびや

句の名哲乃詞をよそへて郭公をよあるこゑにはたちぬ是をこそ
示名人のよ抱こゝろきゆよあやめ生ふ易句にと又人の
詠ゝしこゝ妙術也可考 解 云かくこゝろ宮やこゝろきゆちや
の系あやをつの如ものすれば泳ゆよりかれ泳ゆや
いひ名出る浪るこゝ人は撰今あつて五人の二字は月の雲
もおこゝろ出る金情を面後の晩とゝ乃因法卿
の辛い又人のこゝろに為を撰こゝんやこゝに泳ゝとゝ乃こゝ
袋 此句を出す

説 林 紹巴の説を引て五尺の澄らせゝ長根の浮亡ぶ杜
国集の餘篇に孟遠ぶ記せゝ桃の枝菊阿口傳と云

のふあらせゝ水かもたぶゝぶ是を又て已ぶりのらし
く海ちと又西去なぶゝ紹巴より以前ふこのたゝへ
いまゝく紹巴ハ俗のゝて許云も生こゝ初こゝずやあり
こゝむ又名哲の古き詞を載入こゝこゝても何ぶゝの抱
よこゝゝやせん行ぶ妙術といこゝむや平竟哲句の
風情去と解ちのまこゝたかく海ぶこゝこゝ重こゝこゝ
解 のゝ引奇ハ上の句此吟多成のこゝ所用ね下の句此
行ぶこゝ用ねたこゝ幾こゝぶ此奇によれこゝこゝい為こゝ
らのみや此やもつのあといこゝんたなん序辛可
ありこゝようこゝれこゝぶこゝ意もするこゝ云

こゝろ深。此二句死要くらべ。句意の句多くべきものなり。
此ごろ。古人の奇。そうちあいせんこと。限りなきなり。翁
の句一ツ〳〵。奇妙よりふかくして。自然とかるびくるる
を。一句〳〵よ。古今成合をしい。部て。翁乃徳を減じ
て。課罪ヲて。心骨をのきらめざるの解と云也。又
五尺の二字ハ。五月の梅雨。おうしとゝいふ。人の
死をを。俗よゝ稱ゝ。五月雨ひぐくみや。元祝
ゝ。相を。皐月ふかよゝ雨ゝ。稱ちみやゝ元
雪花ゝ。又乃因の五尺のうちいづれの書ゝ
出ゝ。ゝ。證跡いまゝ乃る事ゝ。

○後鳥羽院。御口傳小曰。後恵法師ハ。ゝ
五尺のゝゝ
ゝ。古語深秘抄。五尺の桂いまゝ。ゝ。乃因も。
後恵の。ゝ
ゝ。○連歌此記抄。五尺のゝ
ゝ。発句の
ゝ。○句意ハ解。ゝ。
ゝ。此一語。ゝ。
ゝ。五尺のあやめ
ゝ。古死泪。子孫を稱

しるし。翁乃風骨。凡那よりたゞひとつ。雪を。全く八重
咲梅を。模寫し出せるの妙。恐るべし。蓋をなく。古
人の詩を。載入るゝ。何ぞ疑ひなく。妙境を。よく入在
るゝ人の事也。林乃詩も。あるべし。

△花盛りとイに有角の去跡とまりて再び討考を去後夏の月二句めより出さるべし

かゝるきぬむ月い梅の花さかりゝ

袋 云正月い梅の盛也と出して是同名を少て今を生きる
を責て汝何ぞ曼にあらんて神を出しけるやを乃
始より帝へきるも幸ひ正月い梅の花盛なるふ行て延引
きるやとゝ云意しる句也 解 云袖日記云ひ句諸集よ

出盛りと出もりもへる人の未練より師の名をあうせり
も雪りい夜更者此氣あみして む月の姿あるす山家集
ふ咲るもれ梅ふもりふ梅ゝ蕾乃ゝ蕾れ夢より山家
の句ゝふ乃ゝ 林 此句を出さる

說 袋、注曰ゝ邪妄。無理無法なるもの。信用ゝ色なりし。
杜宇を。責乃ゝ色ぶ。行て。正月咲べきや。文梅い大
凡二月の事ゝ。ほゝ。寒暖の遲速もいふ色なれ。
押出して。新年の名を二月よりあるゝ。二月の異名を。梅
又月ゝも 莫作 梅津月ゝ。ゝり。花ゝ色ぶんいる。正月
ハ。梅乃雪ゝりもりゝハ○さけ色ゝ人ゝ。咲ゝあふしの

んの句。雪うもれ。さうの花二月に 解 引音小岡雪うもれ。
かなしひて。心合りきりり。もしさけりの方。餘情あり。梅
に鶯。雪の花。雪月花。梅と。源氏物語の。
も稿のなに。ありよりと。早く月日のうつり新恋
月あるうり○愛に深川の古杉風。家孫とる。翁の玉墨
一軸あり。貞享丁卯秋と名作。無紡正筆なり。四季花
句。三十一章。を画き。此句。梅さかりと。
し。誠に正證。とて。吏登も。此軸を見て。少名無
神日記に。芭蕉翁せしいにしへ乃事。予今又依テ其跡ノ正證ニ改
ものと。○白兎園宗瑞云。世に子規朧月。五文字に

亜とき。そこに語をいのまし。心を漏のれば。則切字也。
ぞ。表へかりつるもとれど。ぬるといひきれば。切字
あらず。そこに河の下。おくるるい切字。ひかりくもこ月
いとゝ。句のまれを知るべき。無其未し。是い影略互見
の句法也。無しい予が芭蕉句法に記て。○此句。一句
乃ちうる能は。翁とても。古風。けたぐひの
句のまこと。勢しい。俗の人。解せんよ。その名あらて。
此類の句い。除きて。罪なうべし。前の徳を減ずるの一つ。
なりしあいふべや。予も。ものもとすると。注有解。
俗人の迷ひを歎く。よてやむことなく。愚説を形と○

此句深く味ひ入るべし。さ程に無量の妄説出来たるなり。
く異なる眼前躍の句也。その所に子規の居るを知る
て杜宇あり。卯の花牡丹と、いふものの会合して、鶯あり。梅
さけり。是天地陰陽五行の造化、私なくいふべし。
きの花、梅咲あり。卯の花咲あり。卯の花咲合
ひあるこそ、面白く氣候に随ひて、草木鳥獣の配
ひ。是を重て、彼此来り合ひて、下に句を含る。
義の心腹也。句の癖也。爰を風諫の一字に、配合して、
蕉門諷諫の大旨とせり。都て、句の類ひ、之
ひて、いろいろ、句、様々あるべし。さ

様の句と、況とりの皆准之べし。

たけくらべの松にあせ出たりと峯白

とりの鈴行きもまれ

奥細道記行。玄格の名の乃よ沼せ一おゑ今爰に改め訂す

撥ぶり松いかつく未を三月雄

（句選のとおり）

解 元奥細乃道に案ずるに元禄二年弥生末（七日武州を立て、皐月初め武隈に到る。依て撥ぶり三月雄と云ふ日数を云ふ。爰に懐旧の親疎毫末乃如へ一只長遠の親疎紙毫乃如へ
うるに辛し。武隈の松いかつく本を都人いうふとて

きとらてう　袋林　此句を出さまて

説　解　なるほど・按ずるに・此句ハ・元禄二年五月三日四日比の吟也・武隈乃松ハ名事・初華のなるよ・古ありけきと・大槻を沿て・はり高いもつとなるほどきなり・○按の事通称ハみちの國よりのぼりて武隈の松ハ二本を都人いふと四ツ乃きと言へんかなを奇をよめると自讃しきなり　禅林寺大僧正深覚武くの松ハいとをみきといとよくよめるなれ

右雑和抄ニ載ル

なるへし　浪るハ武隈のこと也○奥義抄云武隈の松ハいつの世よりはける樹ともしらぬ人ハ

うゑしなりとよまれしもまことなりやあるらんとて云て侍る也はけ松ハ昔よりあるとて侍るを後京元良ニ云ける人の任ム館乃おもはて植るる松也陸奥の館ハ武隈と云所ニあり世人二度ハ國の任ム成てハ乃ちひよりあるを奇樹しとも云ハ武隈の松を云ひあひ乃つるを武隈のはるハの松ともよめり重之集武ニ國のはるかつよたてる松ハ我ちとをとなりのちとやハきと武隈乃はるかいとて山のさ出るを奇のあるを也云顕仲云後京元良ハ云しを松跡火ともうしなを後滿正ハ任ム樹を後又ハ道貞ハ任ム植世後

孝義きりて橋ふ造ふ生ぶ後うせをうりのとう云 或古抄説せと新和抄みあり○句意い。松いみつきなるを。橋のうつより旅立やう
くと長途なり。三月紙しよ。武うはふたうつきうると。
姥しきふのう。峯白ぶ。逆さうよ射して。橋よりうつよ。
ふみない。重まうるなるぶ。つきんうきの拍子ふ。
ろうきうよ。新ふあうん。

許六本曾路ふ歎うき

旅人のうろうもいよ椎乃花

説 句選句解ふ云。去ぶ。顔塞集
此句ハ句解ふ出して。解のう。伝寫のうやまう必や。解しぐさし
よ。翁の詞出ハ。越ぶ。左要も論を併せうぐし。

椎の花ぬうろうふもいよ本夢乃旅

此句ハ許六ぶ。顔塞ふ出せう。句選ふいうぶ。今増補し出して。おの句。解
しを解を。洗ふ。要しくいたを乃説ふ引合を。熟覧をべし。

解 云万葉ふ家ふのまもしけよりる旅を夢流後ふ。あれ
も椎の葉くうる椎い葉くを。衣ぬ。ぬもかふ旅人乃
心の風流ふもいよふや

袋林 此句を出さ

説 解 一向当ぶ。解意も亦融通ぶ。ぬも旅人の風
物ふいよふいうふぶや。無理無躰ふ云ぶ。又引合
ふたぶ。ぬうをよ。旅のふ自由なる。さ毎をよみうる。
上古ハをぶて。食物ぶ椎槲の葉よりうをと。東雅も

あしく化されし。此句の解ふい常にて。○叔は句の張
人い。許六なれども。それを出して。あがりたいとて
もきこえず。思ふに。唯うちまうせて。世の中の旅人の多
也。そのあい。許六は。彦根の城主に仕へて。家名高く。富貴
とうひ。博学廣才也。此度本国を出て。舊里に
帰る旅りに。餞別をうけて。舊里に
たまへ。長月ふ俳諧が。張みてうつまし。本国へ帰して
山中不自由なる所といひ。椎を多くいわれば。
拙の。椎孔のさびしく。有う無りて。云ひて袖みてうつら
ばかりに。雲益の寿よ。金銀を費し。学力敏才よ

かるる所にて。都ての旅人のさを。汲ひて。椎の花孔
き。さ海ちのそびなば。いつく旅中孔。風流も面白かる
所にて。さらに。垂戒を合めるる也。乙州へ。拙ちら
ふ支考へい。五器一具のあき。師乃の弟子。俳諧むいつき
ホ甲乙那し。旅人を許六と出して。少くいひ出る也。世
上乃旅人の事を。先ッ挙て。云ひ出を。詞と見るべ。か
く出なくあらざれば。いよ椎のもとつ。不分明なる
也。ふ。椎のもむ。ば人の風雅に。いよしい。武意句えて。一
句もまいらば。入きかぶの。ッキ句ら。ふらん。椎ハもとら
俳きまめ。もも。尺る袖のうをなきれば。許六

ふしぎなるものまれなる事・人をまどはすとて
ものをいひ・うつべき・怪談妖話などにはまりやすき
らぬ椎のもとに・淋しき毎・風雅の心を忘れずと云
て・弟のおよ・尚さる事やひりもじ・句意よつて
角よつけ・あやまりの人とゐに○五老井許六韻
塞集ふ云・元禄六仲夏・五月六日也・翁・許六へ餞別の文章
有略之其詞ふいなく　木曾路を経て田舎ふかく人ハ
喪川氏許六といふ古しへより風雅の情ある人くハ
笈をとりけ草鞋よ足をとゝめ破笠に霜露をいとハて
おのゝ心にまかせ・あて物の實と志ゝをよろこ屋り・仕官

おもひやりの為ハ長剱を腰よりさし・ふりけの後ハ
雑をとりて世ハ若堂の為き羽織のすそハ風よりる
かしこ・ふりさ毎ハ人のなをあはれ・ふるを
推のおもひ・ふるを以て本分乃後・ふる
うき人の旅ハ・ふを習へ本分ハ縄　おもひ
去句一句よ決定すべきよりもとより今賊後の形
ふよ二川ふうなるとゝ云見板市のまに・一字一点
たうぶ・如何ハ・○翁の・後人の心ハ以て・後ふ
さわらるやや・ゆえあやふハ・亜さわらぬ・必ふの
人・あやまる・かつ遠へく・又ふを・傳寫の誤しふや

是非小所不及也。又は二句を一句くずたるいちぢやうて。後の人。云給へ。しるやう。ゐなをぐ。○はんの。おさをは。なるべかりすと。詞をあらためも。示誡の心を。推そうるべきこと也。うき人の接ふも。翌人なるく。教訓のいとなみ。雪日の誠情。今眼よりぐりて。涙をそそぐ。かくぞ。ぐ。○又推の死を。下に置きしを。考るに。許六をさして。椎のもとと。ぜられ。上よりの。旅人とふかもべての。やつきたる人の。旅人を云ふて難難をもる。旅人の。心ふかに。せて。弾勝よ。俗雅なる。ゆるしをせよ。椎のもと。許六をいしてゐる也。是六

義ふ。比奥の躰かて。詩歌連歌ふも。侍人てもる也。只椎の花も。旅人の心よりよりとい。一句を。始てゐ。ぐ。翁の心胸とい。下駄と。徳味雪ぐの。遠ひ。ぐし。椎のもとふ。をいよと。慥なる證文ぐ。宴を初紫に。ゐん義ふ。世間をぐ。免ぐ。全文始終を。書して。翁の私ふき。心中に。初ぐ。よ〳〵考へて。後の人。異注邪説に。惑ふ事なるを。句選ふ。此二句ぐ。巴蕉雀。験塞を。乃ぐやあらむ。杜樵ふるものく。世外誤多し。用ゐ。

木因亭画讃

説 白選の云ひもしたがへる也今笈日記にて改め訂まる

ぬるぬるぬる

らむ。○句選并に句解・竹醉日と題書と・是いにしへ
の書きぶり・笈日記に云く・大垣にて・画讃二句あり・如行
亭菊　[illegible]
[illegible]の節をいふ・[illegible]と云ふ無し句に竹を
画讃也・竹酔日に一句の新句也・類[illegible]
う古今抄第二にあり。

画圖軸　粽[illegible]

右二章を画圖の軸とす祖翁ひとり猿蓑の選場にかくる
句後の面影をも一句に入集とき[illegible]と粽の句を送

[illegible]遺稿の[illegible]竹樹の[illegible]句も
画圖に形容[illegible]孟宗の[illegible]
[illegible]竹酔日の[illegible]
[illegible]諸く義笠の[illegible]有声の画
垣の新を・俳[illegible]・冊句翁初発の[illegible]笈日記大

袋　云象潟のもと合歓の花を添る句也西施を入るに彼云

象潟一見

[illegible]の面や西施が合歓の花

宗の楊貴妃を職海棠いまだ眠足らざるを雨の色の濃くして西施の眠足りて深い眠るがごとし 林云松浦い知よりなく象扶桑第一の好風みて造化の天工特形容を筆端に奪へり美人の嗅海棠を雨帯るを楽あるよりて合歓のごとき西施を海棠を眠るを象らしくやうう合歓の歩みうつ垂さしる美人のうへ合を象濃は色象を象はるを象と叶へるを詩意高也特可意 解しは白出さし

説 代表 意注言語糊を含ひ巧なるこの如くを工巧妙い西施よりうるかふ宋の代孤のみ何とも無来の如き言句方らべ合歓を西施よりうるかふ言句方らべ

らべて方大よりおくるしかしい合歓の句と云へ一みる共な意を主ばして解をもなく巧なるを育にしつまるさ叙る孤形く解をもて世の多ひとなるるを方ば可歌々山句の歌句も出どうを人詩に玄宗も梨を海棠も猫を杨子も入るべし

○聯珠詩格曰題西湖詩 東坡

水光潋灩晴愛好 山色曚朧雨亦奇

若把西湖比西子 淡粧濃沫兩相宜

此絶句を姫まへて蚌濁を洞庭湖に比して作るる句なる事形無るを象の九句なる孤稀なべ此詩をよく味

ひとりなれば。楊妃も。海棠を。注ぎ酒を入るゝかたに。かゝる。
出所をぞんじたるまでの。かゝるさびしゆゑ。一句にしてかゝるべし。
二十八字は詩を。翁は唯十七字に。綴りあはせて。出るゆゑ切字
までたしゝる也。淡粧濃抹と。いふよりまで。一字も。そゝ系なを
ゆるさぬゆゑ。深に俳諧の家は。名誉なれども。高名なれども。
但し西子は西施也と詩格の註あり。○まぢに。奥の細道
の文章は。雨朦朧として。海の山かゝる。絵画に。美作して
面白く。奇なりとせば。雨後の晴色又新なるべしと。文
右の詩語を。載入くるをぞ。ふかくやあらむと。口惜か
りし。合歓は波地。あまりの海よりも。佳て。季と。句にも。美人

の形容。淡粧濃抹を。摸寫したるなり。此句
字は摸寫。なるべしゝ。文物は書て。実情をうつす。凡笈は
らめ。不ん。是より。前。古人蚌鴫の吟。なるべし。うれふ。
もの更かな。○象潟一見　山色縹渺雨奇絶淡粧濃抹
いひもしを又奇なる。色とて。詩書なりて。此句ある。翁の
ふ跡。越後国。沼垂町。安部氏某。家跡とて。

花のうへ漕とよみ。ひとりもいき。樹もいまる
蚌鴫なるの。きりへ。なみ。弥生。法華を。ゝ。
夕もゝ。ゝと。海。ゝ。うもゝ。

夕ちるべきさくらみ添しぬ海のうへ

林 云西行象潟の橋いはようつりてをれよりあまのはしり舟
中絶のをいあををぶしたるへし 解 云同辛を出して解如し

説 林 をのうへにいあやまり也西行の辛い花のうへこぐ也句
選ま西行橋と題ま也もしはまこしらへ添るをもしり
ま為い西行橋い法師ま句のまま所あり遠行の体嵯峨ふ
ひの象ま西行橋ま也もしまきまるを也かゝるふ書
ま句のまま也伝用し難し 解 橋ふすむ也と進む
み紛もやすし添むと字ま也 ○ 林并解 象潟

西行橋みてと況も予常に素龍ぷ記せし古板の奥細乃
を考彩ま象潟の文段に云むとまの岸みをあうれも
のうへごとよまれし橋の光本あり法師の記念をのこと江
上み沸陵あらうとしひうて此句ま句ま此句ま何
とてあらされ侍らん是ま句象潟いぶ也しく諸集を乃
に桃隣むつふ多ふを象潟の句みをうら光外の集も又ま
通ふ乃ら慥ま證ともる事ま叔年波ぶひぬ然ふ去
年我門弟安房の國ま乃る幽奥信故口の無住ま乃ひて城後
の新潟へ招ける時城侯みて翁のふ跡乃ふとて送れを
見まぶ此のうへごくとまみ移ひ乃む古き橋もいまま詳潟

もれきりて波を引きをる夕なれいと涼しうもきこえたるかな 詞書ひろて・此句ひろ・右ハ越後の國新潟の町沿岸町ノツタリトヨム方言也 野仁義・家窶ときるを也 爰において・好て胸にうけけるり・ひろも・廣く求むるに当くいかし・○句意ハあきらかなし・はたの・蔓ハ絡ひて・夕時の沿ハ也・さくらも花ハ又かしたる・風情いとうるわし・沿のをい自とうたい

ばうしうや

蔓まきをたぐひ引ひ引蔓ハ絡ひ

袋 云是ハ我分ハ限らず世人のいとなみ多き果敢なきを歎きて高ハ

のまく始るなりかしたらんを一ツ蔓ハ文芳の義きるハ引ふを一ツなるうるうるう

るべし就中也。大徳ハ題まで。徳の深くるゝ。徳あるゝとゝ
うや。深し。雀をはまぐてゝ爲変と。きゝし比。吟ぜ侍るゝ。

○笈日記。岐阜の新あ。此句貞享五年夏の吟也（やうてうのき 格あるべし 解なし）
一巻ふゝゝ。紀氏。句選ハ。ゆゝ雅集ハいひ引。こゝゝと。
張出して。一巻ふゝと出て。考ふ一ぬのひゝと。字かさな
ぬく。深淵も身ゝつ成。ひゝゝゝ深ぬ。ゆゝ雅ハ。笈ゝ花
ゝゝ。心ぬ集て。翁ハ世ゝ。證とすべきゝ。
きゝても。句意ハ。害ゝ。このゝたゝぬの通ゝ。

四一枝うゝて之（イ。之ゝゝゝ誤ゝゝ）ゝる柳。こゝれ

袋 云此句ゝ女を蓑ゝ爲句也。たゝやゝなる柳陰の女ゝ四一枝
を植て蓑之ゝ。ゝ也 解 云芦野ゝと云ゝ芦野ハ下野
国。有名の名所ゝ。ゝ流ゝ柳ゝ。ゝ之ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。

を入るかなやとしかしゝ面今つゝ不業のこゝろとして滅亡する胡乱なる
物を指をたかきに五七章に成りしとかゝる中なる奥の部なる

同一枝うゝて ゝゝ 柳 弘

物ゝて扇ひきはくゝ 弘

柳の一ゝ八奥の次賀川ゝゝゝ人の後ゝ植ゝゝ之ゝゝ柳ゝゝゝゝ比
の之通ゝゝ之侍へ扇の一ゝ八賀府の小枝ゝ山中ゝ尺遠ゝゝ撫の茶店
みてゝゝゝ扇ゝゝてゝゝゝゝゝ今ゝ部ゝゝ侍へしの扇ゝき方
ゝゝゝゝゝ

定りきりしとゝ、べば是を永持難きあやゝ去ばとゝ、を去こゝ
ばゝ田一枝ゝ去ゝる風情のさやゝに深しとゝ、べば之を去て体ら
ひゝらとゝ見る也。此去場の詞と。前句はゝつゝひあゝて一句乃
意ゝ、まゝ所大切ゝ、ゝるものゝ、ゝいふゝと云に○奥の細道を考る
に清水流るゝ柳ゝ若狭の里あゝて四の畔ゝ跡ゝ此所の
郡守戸部某の此柳乃せゝやゝゝと折くゝふの移ゝ、ゝ、ゝる
まゝふもゝいつくのゝゝゝゝあやゝとゝゝゝゝを今日ゝ柳のゝゝゝて
去ゝゝ、ゝゝゝと詞去ゝゝゝる云有素龍手跡の古本ゝゝゝ検校ゝ是ゝゝて
乃ゝゝゝば去去ゝ家初乃念ゝて去去ゝ場の姿ゝゝと知ゝゝる
也○十七句法云作者不詳此句摸寫變態格也○宗瑞云去ゝる

とゝ、ゝゝ古今のまゝゝて去去ゝ一格ゝゝゝゝゝ摸寫変態とゝ
ゝ西行の詞を摸寫して去去ゝを去ゝと変態ゝゝゝゝゝゝゝ
と支考ゝゝゝゝ去ゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

してゆくや涼る涼入駒と云へしあや切れば隙入物なら
ぬ生きゆのみ為命しに春の日ちやいうんと大和ちり是亦
言語文既摸羅含糊小しして詞の抱法のやし初葉やはうしい
納得しがくまえ。○此句意只当のるえと天命し光陰の物は
大き当らぬして入がうえ翁の句みあれば者と云ばちや麦
妹まえ種と云ちあこ芽ともし案ちうちやうちやえ
此句ハ我が雲ち漂泊の命ハ馬尺まふなぐさみてりぐのてく
しぐくちるく面りをるく。うくくと一生を旅中ふ色とを芭
り弱の者ふちるして行くちそこと就あんじちうるめ
ひとを年ぐ。宗祇の言ちる茅といつる。同しやうう大切の句

の意ちる命也。おくも面ちを入ぐみ解ち成也。

櫻乃木のちるかまちあ姿うれ

袋云是翁我分の性質の淳朴を物ちて句とえ人てうち愛ハ正
直ふして世の諂諛小徒りあハ世のうえ兵ぬのくふを切ちるる
句なり。林解此の句ちを云

説袋妄荒翁の性淳朴ちる何ぞ自慢の念ちしやいう
かい正直ちえ。つぶべのうぐ是翁を言ちる人翁小罪を課を
ぬるちの也。○句意ハ兵死よりて世俗あるみ行ちるぐらうし
は種い死ル行ちるちまうふ以て名香を爭ちて行ちる。

樹本ふい・揺らで・樹くおのづからなる思へ・ぬのうん人
いかくこと・世ふいのうらうの・扱うと・常盤本は・不易のしく
良材ありてあのしるの公ぬ。○句選ょり成人の山ゑのよりう
てうつふ詞ぬ・ぬ・そうふ人ふ對して・種ょ長し
く・称美ょり成・接移うるの・は詞ぬあって・は句ぬ言ふ・ぬ・さも
ば詞ぬい・句は・ぬうと・いのうとものと・いん・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・ぬ
ぬ・ぬ・ぬ

ぬ・ぬ・ぬ・ぬ・

今日の句ていの句ばかりなり。何とも論なし。又注者、呉淞の行業
双鯉、百姓の、翁が支流を、二段を又作りしが、旅人の、かつらを
振り捨てしかの角が、ふるいかとゝ云句、短冊の方にしき
三句一軸にして、三人の三別なり。ちまたの固定の句三句ハせられ
ぬ。ゆゑなり。ゆゑに、二段の句ハ是全く餞別なり。
ぬ。親恵也。一ゆくと、角が、ふるいハ、餞別ばかりなり。不吟味にして
二段の句へ、素良の句を、遠くへ、ふる句なり。二段の句 袋 少
莫季なり。是也。句選小番の句ハ入るハいなし。角ハ
句ハ、ゆゑ、角がまゝ初の形容也。五六月の比、やゝ長しを
岐のつゆ。風情也。決句、其の句と、定まるなり。○句意い

番が、麻の角ふて、やゝ〳〵淋しけ句なり。莫季なり。又角やゝ
まゝ。句二段ハ、ふりなり。又れなるゝ、ばかり、物淋しき、やゝ
意ハ、ふる。枝の歌が、はなれなり。歌恵、妻なり。
ゆくゝ、ふるゝ、ふる角と、句作の玄妙なり。第一まゝ離
別の句、ふるゝ、ふハ、ゆゑ、ハ、ゆゑ、ハ、ゆゑ、

とばしる。滝なるべし。翁句。翁は一の新句也。無度二句づつ。
きりくるる。粗々し。高低より。杉風へ文通あり。菓の事や
高低いくよりも男振。菓のあやや高低あるき佛也。二
句いまぐ。変なり。他人の用捨なり。山外清澄。大井川
の。改作なり。名人の句也。用捨事。そべてなり。芭蕉記
なり。作者変也。

這ひいでよかしら屋がしらも蟇乃声

解 云は句蕉翁句選ふ者の新ふる句いさぎよき句ふあるなり
春ふるに蟇也。夏の語也。名月ふのもしも春と句ねしふや

母を見まもりくるる紀行の紀行をひいて夏蛙ひいてとこそ
蛙下句奥の細道紀行ふ曰尾花沢にて云ふ也。
源氏物語ふ云て蟇ふ
這ふよかい屋ら下乃蟇 新蟇
池行い蛙ふ紀行の句ふ志ふて夏ふ深氏ふ蛙賀ふ
ひの中ふ望月中のまるくを遠出ふ人とふ云ふ **解** 云蟇い夏蛙
ふ作者蛙ふ海道ふ蟇の新句ふ新して眼前蛙と又ふ云ふ蟇
い蛙ふつく句ふて辛ふ新句ふ蟇ふいやふ下に蛙ふ蟇ふかきふ
て新句ふ句やも **紫** 山句ふ句ふ出ふ次

説 **林** 源氏の詞を引ふ。大にあるなり **解** のり新句ふ句。芭蕉
たるなり。又ふ源氏ふ句ふ句ふ句ふ。新句ふ句ふ。蟇ふ蛙

名蠶飼也蠶ハ眼前の名今世ものふて蠶とせば蠶ハりと
よりも蠶飼ハ蠶ハ蠶飼ハ蠶ハ蠶ハ蠶

儿童多シ只ナミ〳〵ノコトニハアラスト思ヒ知ラルヽ也○鮮ヨリ形ノ高下ハ白たゞひあり。かゝ下の白も亦ゆゑ也。人かゝ屋。別の物なり。蛍蓋なりといへども。初葉つゝあ。挑材の助けなり。○堀川百首肝要抄貞徳作第十五 はすらをゝりふしつゝ翻如しつけしうひやゝ〳〵しい水きよりう 貞徳注云かひやゝ下れる顕昭の説い蛍燭をよせたるあの上ノ屋を作りて螢を飼ふをいふ。今も田舎ハ多くまとゝいふ。後成卿説ハ麻をよせたるか馬の尾なるべくそれ物を繋ぐる由なをとし。六百番判言合ハ蛍しゝみ〳〵ら更ハ葉ハ多ハ屋ハ右の表況ましい共多不叶。見い姫一ぷけの上に屋を作りて火を焼

その火氣ましく奥をよせてやゝ高上紗屋なるべしと云○今時冠字考ハ麻火屋ハ決しゝ屋ハ和下の方ましい。先ハ角ハ俳諧ハ倍習ハ数ハ螢飼ふ屋ハ。うひやといふ。うひやとつゝふるつゝ也。予蛍の部ハ入しい紀行の時候ハ。ふるもの也。蓋ハ代よりずはかりひやのつゝい異説多く。多くハ。連歌の家ハ。定めなるべし。其實ハ詳なるも。中古春夏ハ。よみしかるべの事ハ。連歌共麻火屋の。附句ハ。別ハつる。変化の夕烟なり。多しる。ハ。そ白ハ。事ハ。翁の句ハ。夏ハ。紀行ハ。初夏なりけり。いよく初夏の季なるべし。附合の時ハ赤白ハ

夢のごとくなる事也しかれ共一夜の間に長くしぼむ

あさがほや其咲の乃種よ出つらん

解云其縁の来りいつしか咲たりしの種よいつよと時芭の親恵
咲たりしいまを愛て閑しくる菓子に上鶉もきこしめしてあや
枕草紙ふ咲さしとつふりの也を人のりて咲るを下略

説二夜問答云はは句意いまの種はとまきをとりてすこし
妙なる趣を縣人まぶしと云是は春は雖抱ひふ事解ふ
りのをつくるゆゑなるいふ種と成て出つるむとなる
是咲たりてふりのをとふるふるふるやいふるる鄙

ひて人の咲ふるなりの為ふ何とふりのと云
廣くふる趣の通ふる事なり枕草紙ふ名目出ふいと
て咲たりやとはのうふふしひ其言制表の委
かふさふ芭蕉ハ伊の伝もなくまきしやんて咲たりと亜
たるまてなるむを語者ハ枕草紙を引るまて却て芭蕉の
罪を長ふ古人ふかふ遠ひ為ふを後の人眼をりて正
ふてふなりとふ右の説ふ伝ハ爰ふ筆・無ふ也説
高く学理成べし・その人翁をまとる・庶をふ云ふ
此罪莫太也○先一ふ咲たりと云つけふ面むハ言葉の委
しかふさふと芭翁を幾しふる通ふ藪をのぶれふ

て、又云、芭蕉いはのかもらく書たしと雖すべてこと葉
はぎつかしく侍比與也、書たしてこと葉辭の樣ふるつゝ
ハ云いまゝ、民間人詞多くハ書たしこゝばうるはしく
え、世上ゆゑ通ずる事也、俳諧ハ、倍諧歌語ゆゑ、國くの方言、
民間の鄙語、まてゝ、こゝろにかなひ用ふる道門の立流也、
夫れ何ぞや、雅語をもりて、詩と俳諧と和歌と、
さんだふ、あきらかなるべし、俗の人眼をもりて、正とのゝ
べ、云人ハ即ち說者なり、書たしてこと葉さ
ゝめ、はつく彫て、發句ゆゑ、雅語のあやまりとて、
なほくハ百韻の間、百句のうちあるてゝこゝ間つゝふハ由

節なる事也、其くて一口の咍ハ通ぬ、古の連歌の物口と、
えゝ人ぞ、こゝ間なるつゝ、今に至てハ書たし
やめて、ゆゑ、ゆえワの歌、是俳諧也、編僻の說
者ハ、俳諧の自ら何を初、是ん、無理ゝ、句意ハ
ゆゝからず、

風流のほつゝやおくれ田うゑ

袋 云奥州白川の関を越て、鄙の果なハ、扨のやたしき
事也、是ハ、きこの昔ゆ、北西ハ風流ゆゑ、
んゝ也、或人の曰、白川の関を越して、奥に入る、奥に

の風象のゆくしは四方をすたりとして八道なれば方
を隨ふなり　林鮮　此句を出せり

説　此註ばかりくいるるせいにもうはは注は妄説也奥州より
かまくらへうつる。○按ずるに猿楽能を夫家より風流とて
祝ひしもの十七八篇ありしなれども狂言小田う忠盛とてみな
別小唄等のみを思ひ只風流ばかりをみてこれをさるべ
き。都て上代より祝ひ侍べ。うたひものはあいはみち
のうち四うの忠盛の事部りて祝ひまん。さてこれをもくゆう
しく古風なるかなと賞をする句なり。一句の如まへ能を夫
狂言師の祝ひものより出るべ。翁の句は底意く何ぞうぞ。一ト

四まへありて共事をいはしして今日平生に常のかも通変
をなるなり。句作る事玄妙也

うの花やくらべき柳はなれば越

袋　云元遠路を隔てる人の方へ挨拶也を方へ今時を伺ふる外な
の白く咲部をなるなり。我柳の時色て余江月も手置なる夏
流をの志りを流を隔てる及ん越しなるなりなる懇意ある人へ侍文
なるの時分なり　林鮮　此句を出せり

説　一向の無理妄語。世人不用も亦也。爰く信ぜ八ばの意
はあきらかのあし。共場の即興なるべ。禅語小柳暗花

明と云ふより出でたる也。按ずるに、盲人のごとし。白氏文集の
病蟲老鶯なるべしとも。かなしく頻に来りしなり。筆法は
うも吟ずるに尾も音なく合点のゆくをもて遊翁
の俳諧とも云ふべし。為辨抄を併せ見べし。

圓覺寺大顛和尚ことし睦月のはじめ遷化
しぬよし。遠方へつかはしき
ふ角方へつかはしき

ふくるとて卯のもとあはれなるみちのく

梵 云梅ふくるとて云ふ。いかなるに我この心風雅に卯のお梅

ひい彼和尚乃近化を守しるも

説 注一向ふかうもず。文語糊をつくしかくてのうらん。諸集
ふも。句選ふも。梅ふくるとて云ふ。我こころ風
雅とも。ひとしかるべし。又睦月遷化と事なるべし。
梅ふくるとは。ひとしくふりしかたぶくるなり。遷化を守うらい
世月の初とえんまを。梅の方い卯の方へ。時候近し。梅二月
梅ふくるとて。就おもふも遠きものも。俳諧はいわら近き
時候を云今也。ひとを述る。乃ふくるも。遷化の睦月を断まて
梅ふくるとは。理屈ふ近うべし。○句意ハ。ふくるとは。色香の徳
きえんふくるとは。甲斐ふく。愛きうの義とうつれ。ひとめ

るよと欲きやさけしこ。あひちみぐさこハ。通向ちゝと云後の
発句。亜ふ拔しうる発句なるもいるこぞ。外のもの。愛ふ　ゆしうる通。
和哥の血脉。和語乃優美也。

藤の実い俳諧ふちん　花イ　師イ　奇の稚

林　云此句い初夏ニ泊船集ヨ秋の詠ふ入ること無之朱宗祇法師の
句ふ剪誠ちて寄も義しろみさの句ふ右の句を洗句ちてかくゆ
ちるや稚の秀　袋解　は句を出さ決

説　林　浮なし。宗祇の句を。筆ちるの通。藤の実。実中義ちて
しるいまだ。文ちも定ぐちし。りや桜の実ちぐ。例をちて。

ちもふい。神夏中夏ちもちぐ。都て実ちまきハ。夏。熟
したるい。杜ちは。季立の公道ちちん。秋ちちるハ泊船集ハ。
りちる。誤多き事なハだ也。○句選ふ義ちるこ決かちちん
ん花ハ宗祇のむちふ句ハてちる泊出ちを出せり。ちちん宗祇
の句ちちる出ち。一説しちりのちん。○藤代浦坂ハ紀伊國の
名所。藤ちまちまちぐ。古歌ちもあまちいち。○此句意。奇の稚
ちちちこ。陽ちるやちふ。ちえ発し。りや。俳諧ふの稚ちぜん
ちちに仏ちや。言ちに新く解したちん。緩怠ちちぐ。ふ堂上
の外。地下乃いちふぐきみあちぐ。俳諧ふの稚ちて。ふ
ちちを汲ちんて。俳諧ちちの別ち出。一変して。世ふ辛

の片破のごとくなりて我をごとくれまでも情を述そひをゆるす
かぞへらるる此句解せんみん後の元い詩寸連俳[illegible]
もやし[illegible]てなきあり[illegible]ちるを[illegible]愛いかうくさべて又梅
らるること[illegible]こと[illegible]よりも俳諧乃場あり[illegible]話ふふよまかり[illegible]
のあるの実ちりぬいそぐ梅ぞや[illegible]俳諧は種ふせんとぞ[illegible]
ちと解せべし是はさて温厚寛和の解としてあるべきもの

霜のうち梅ゑさけ[illegible]火桶[illegible]

袋 云古き代を思ひてうきひとり世の乱まてる時功有て用ひら
きしかも梅ちりぬを霜の時用ひし火桶をいとうふ成て梅を

ゑ植らるをて其ゑ[illegible]ゑ梅ゑを今時ゆく人みたりて貴賤
あるの句作也 解 云此句ハ蒔繪ふるも元かりたる火桶に梅ゑ植ゑる
達さのさまとなる七古き世を思ふの風を[illegible]べし表ゆる
あしきの[illegible]ふひとをふさけるかりうかてしく又火桶み
画事ハ無益ものハ
暑ゑ

説 袋 深入して妄説是しかは消滅せんと枝ハいつれ
の句をてをけらるかをぐ又世の乱まてる時のを功を人
用ひらるをまや治世の時ハ功なるかをぐ[illegible]和ふ堪ら詞
の古代を思ふをを注しるを句の注をけらるを 解 [illegible]
を引かをりをを[illegible]又道せのさまとハ[illegible]道の生

に蒔りたる神代、爰ふ、蓋生の苔はとゆ出てしもるもやゆ
出雲ゆ対して、古代を感慨せば句ゆ、ばしば、ふ、ふ、ふ

まだ引分もかぶらぬ新乃ほの又りいたしみけるを
ちんぬ出しうる酒うるも心つくべ表の方し且いけ火桶
しつ今いむうに人の捨うる物を拾てしけ是ハちでしこの表
はへうるて引りけるまと訳しうる也紙人のりて是を思れ
そてなるまや蛍袁ハ世の者形のうつと瞿麦の迫乃ぎきみも
感情深き句も石竹とも百合とも引ぎきとあでしこの雪ニテ
不動をもん○清弁ハ句の様ハ見れ重ふや入ぎうん
上ハ表の後とつん下に火桶と二ツを重ねて体おうりて立ん
せーうハ捨ふハよせ物をてうぎ一つの名ハ朗詠集の菊の詩
ふも霜逢老鬢ハ三分白ニシテ此花開テ後更無花と元稹が作り

きるも秋乃末ふ火桶の死もとあるを此菊ハ咲のそこの死の後
ふハ咲ある死もなるまぎきとうん表のごとくハ句もあるあり
表の後ろる後ハふ桶の死もあき死しも火桶の火持ちふや和
ふおうりたるを死と云ふ物ちてしこれ浮ぎ風ごとくとふ
ふや捨ふの死を云ん赤き物ある云ふ又火桶ふハ中古を
瞿麦を画けるあハ乃ふの様せきるふて二月おるふてかくハ
句作をいりしぶべーとうりハ説もまと拾遺しいうを面ふ捨ふハ
名合せ物と云ん一軸ハ火桶の句ちりぎや又火桶と画し瞿麦を
咲けるも引しふや知ぎ表の句ちも乃りハ作りは清
集夏ふ出しうるぎ弓ふ改もまぎ後鑑をまりの

増補

ゆふべみるものさみつゝぞ瓜の花

(説)菊阿口傳ニ云、西行の歌に、心性はてしなくとゝ云て、頷めし、人〳〵ゆゑやはなる雲花ゆゑ雲花ゆゑ雲花ゆゑ

同上云はく玉志亭ふして紙涼の集奥の瓜やりてかし
数句をもとめて曰句なきものハ筆ハ筆ハと戯れ給ふ
云はくてハ句あり玉志ハ出羽庄内町目みて此去筆の一油家珍
しくてと云

(説)句選ハ作てみや刻らん海みやきんとハ云又ハ写みや
切ん海みやせんとも云ハ偽写の語なり又ハ浮ハ出さハ
みや不詳也最初の出ハ元禄二年晩夏の吟也○
曲禮曰為天子削瓜者副之為国君者華之云々小笠原躾
書云熟したる初瓜ハ二ツに刻又横に初瓜を刻時ハ
刻ぶたを切ハ用ゐていハ又刻ハと云和漢くのごとく

禮ハ初瓜を賞して竪みやうらん海みやせんと棄
し給ふ深意あらん

やちぐさ

東西夜話曰今青理屈の論ハ法師の法吟神の業ハ大切なハ
ハ行者と云ふ法師ハ曰吉ハ何某寛相院ハと云ふ山伏の旦那
ハ吉ハ云ふ吉ハ云ふ次の表或人の云風雅の理屈やたとて
柳ハ理屈句とん〳〵理屈なきものハ云ふて竟に俳諧ハ
人の句を学ぶ為ハ学ぶとも云

右二十有四章

加藤
ムマ十三号

蕉翁發句説叢大全卷第三終